

# 偏微分方程式のお話

## 解の存在について

小鳥遊悠斗 (ことりん@kotori\_y)

京都大学理学部 (B4)

2012年3月6日

- 偏微分方程式って何？
- 何が問題か？
- 実際のところどうなの？

# 偏微分方程式って何？

- 偏微分方程式 ( Partial Differential Equation ) とは,  
→ 未知関数の偏微分を含む方程式

## Examples

- $\partial_t u - \Delta u = 0$
- $\partial_t^2 u - \Delta u = 0$

ここで

$u(t, x) : \mathbb{R} \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 未知関数,  
 $\partial_t := \frac{\partial}{\partial t}$ ,  $\partial_t^2 := \frac{\partial^2}{\partial t^2}$ ,  $\Delta := \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2}$  (Laplacian)

とする.

# 偏微分方程式って何？

- 偏微分方程式 ( Partial Differential Equation ) とは,  
→ 未知関数の偏微分を含む方程式

## Examples

- $\partial_t u - \Delta u = 0$  ( 熱方程式 )
- $\partial_t^2 u - \Delta u = 0$  ( 波動方程式 )

ここで

$u(t, x) : \mathbb{R} \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 未知関数,  
 $\partial_t := \frac{\partial}{\partial t}$ ,  $\partial_t^2 := \frac{\partial^2}{\partial t^2}$ ,  $\Delta := \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2}$  (Laplacian)

とする.

# 偏微分方程式って何？

その他にも

- Maxwell 方程式,
- Navier-Stokes 方程式
- Schrödinger 方程式,
- Korteweg - de Vries 方程式,
- Burgers 方程式,
- Dirac 方程式,
- Hartree-Fock 方程式,
- Ginzburg-Landau 方程式,
- Klein-Gordon 方程式,
- 

などなど様々な方程式がある。

# 偏微分方程式って何？

PDEは物理現象のモデルを記述する方程式！

物理現象  $\leftrightarrow$  PDE (  $\leftrightarrow$  数値解析 )  
熱の伝導  $\leftrightarrow$  熱方程式 (  $\leftrightarrow$  HEの数値計算 )

PDEを数学的に解析することで、現象を理解することができる！  
(それに加えて、PDE自身、数学的に豊かな性質を持っている)

# 何が問題になるのか？

問題 PDEは必ず解をもつか？

# 何が問題になるのか？

問題 PDEは必ず解をもつか？  
→ 持つとは限らない！ (Levyの反例)



# 何が問題になるのか？

解の存在しないPDEがある！

Fact (Hans Levy(1957))

$\phi \in C^\infty(\mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R})$  とする. 微分方程式

$$-\frac{\partial u}{\partial x_1} - \sqrt{-1} \frac{\partial u}{\partial x_2} + 2\sqrt{-1} (x_1 + \sqrt{-1}x_2) \frac{\partial u}{\partial x_3} = \phi'(x_3) \quad (1.1)$$

が原点の近傍で  $C^1$  級の解  $u(x_1, x_2, x_3)$  をもつならば,  $\phi$  は原点の近傍で実解析的でなくてはならない.

# 何が問題になるのか？

考えているPDEが解をもつことを確かめなくてはいけない！  
＝考えている問題は**適切**か？

具体的には与えられた初期値に対して次を確かめる。

- 解があるか？
- その解は一意に決まるのか？
- 初期値に連続的に依存するか？

この3つが成り立っているとき、そのPDEは**適切**であるという。

# 実際のところどうなの？

具体的な方程式に対して、適切性について考えてみよう。

## Problem

次の斉次熱方程式の初期値問題は解をもつか？

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = 0 & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

ここで  $u(t, x)$ : 未知関数,  $\partial_t := \frac{\partial}{\partial t}$ ,  $\Delta := \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2}$ ,  $u_0: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 既知関数とする。

# 実際のところどうなの？

実は次の定理が成り立つ。

## Theorem

$u_0 \in BC(\mathbb{R}^n)$  とする。 斉次熱方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = 0 & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

を満たす  $u$  が存在する。ここで

$BC(\mathbb{R}^n) = \{u : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R} : \text{有界かつ連続}\}$ ,  $u(t, x)$ : 未知関数,  
 $\partial_t := \frac{\partial}{\partial t}$ ,  $\Delta := \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2}$ ,  $u_0 : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 既知函数とする。

## Definitions

- $\hat{u}(\xi) = \mathcal{F}u(\xi) = \int_{\mathbb{R}^n} u(x) e^{-2\pi i x \cdot \xi} dx$  (フーリエ変換)
- $\check{u}(x) = \mathcal{F}^{-1}u(x) = \int_{\mathbb{R}^n} u(\xi) e^{2\pi i x \cdot \xi} d\xi$  (逆フーリエ変換)

## Fact

- $\mathcal{F}(f + g) = \mathcal{F}f + \mathcal{F}g$
- $(\mathcal{F}^{-1}\mathcal{F}f)(x) = f(x)$
- $\mathcal{F}(\partial_{x_j} f)(\xi) = -2\pi i \xi_j \mathcal{F}f(\xi),$

Proof.

斉次熱方程式を  $x$  についてフーリエ変換すると

$$\begin{cases} \frac{d}{dt} \hat{u}(t, \xi) + 4\pi^2 |\xi|^2 \hat{u}(t, \xi) = 0 \\ \hat{u}(0, \xi) = \hat{u}_0(\xi) \end{cases} .$$

これは  $\xi$  をパラメータとする  $t$  についての常微分方程式とみなせて

$$\hat{u}(t, \xi) = e^{-4\pi^2 t |\xi|^2} \hat{u}_0(\xi)$$

が解となる. 従って逆フーリエ変換を施せば

$$u(t, x) = \mathcal{F}^{-1} \left( e^{-4\pi^2 t |\xi|^2} \mathcal{F} u_0(\xi) \right) = \frac{1}{(4\pi t)^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4t}} u_0(y) dy .$$

を得られる. これが解となる. □

## Theorem

斉次熱方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = 0 & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

は

$$u(t, x) = \frac{1}{(4\pi t)^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4t}} u_0(y) dy$$

を解にもつ。

# 余談：熱方程式の性質

解の具体的な形から次の性質をもつことがわかる。

- 平滑化作用

少しでも時間がたつと解は滑らかになる. ( $u \in C^\infty((0, \infty) \times \mathbb{R}^n)$ )

- 無限伝播性

熱は無限の速さで伝わる. (初期値  $u_0$  のサポートがコンパクトでも,  $u(t, x)$  ( $t > 0$ ) は 0 でない.)

- 熱の減衰

熱は冷めていく. ( $\int_{\mathbb{R}^n} |u_0(x)| dx < \infty$  なら  
 $|u(t, x)| \leq \frac{1}{(4\pi t)^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} |u_0(x)| dx \rightarrow 0$  ( $t \rightarrow \infty$ ))

- 熱量の保存

熱の総量は保存する. ( $\int_{\mathbb{R}^n} |u_0(x)| dx < \infty$  なら  
 $\int_{\mathbb{R}^n} u(t, x) dx = \int_{\mathbb{R}^n} u_0(x) dx$  である.)



# 実際のところどうなの？

では、次の問題はどうか？

## Problem

次の非斉次熱方程式の初期値問題は解をもつか？

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

ここで  $u(t, x)$ : 未知関数,  $\partial_t := \frac{\partial}{\partial t}$ ,  $\Delta := \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2}$ ,  $u_0: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 既知関数,  $f(t, x): \mathbb{R} \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ; 既知関数とする.

# 実際のところどうなの？

実は次の定理が成り立つ。

## Theorem

$u_0 \in BC(\mathbb{R}^n)$ ,  $f \in BC([0, \infty) \times \mathbb{R}^n)$  とし。

$\exists \sigma \in (0, 1]$ ,  $\exists C > 0$  s.t.  $\forall t, t' \in [0, \infty)$ ,  $\forall x, x' \in \mathbb{R}^n$  に対し

$$|f(t, x) - f(t', x')| \leq C \left( |t - t'|^{\frac{\sigma}{2}} + |x - x'|^\sigma \right) \text{ とする.}$$

このとき非斉次熱方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

を満たす  $u$  が存在する。

$$\begin{cases} \partial_t w - \Delta w = 0 & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ w(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解  $w$  と

$$\begin{cases} \partial_t v - \Delta v = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ v(0, x) = 0 & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解  $v$  を足せば

$$\begin{cases} \partial_t (v + w) - \Delta (v + w) = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ (v + w)(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

となり、求める解となるだろう。

$u_s(t, x) = \frac{1}{(4\pi(t-s))^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4(t-s)}} f(s, y) dy$  とおくと, これは

$$\begin{cases} \partial_t u_s - \Delta u_s = 0 & (t > s, x \in \mathbb{R}^n). \\ u_s(s, x) = f(s, x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解である.  $v(t, x) = \int_0^t u_s(t, x) ds$  とおくと, それは

$$\begin{cases} \partial_t v - \Delta v = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ v(0, x) = 0 & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解となる.

Proof.

つまり,

$$\begin{aligned} u(t, x) &= w + v \\ &= \frac{1}{(4\pi t)^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4t}} u_0(y) dy \\ &\quad + \int_0^t \left\{ \frac{1}{(4\pi(t-s))^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4(t-s)}} f(s, y) dy \right\} ds \end{aligned}$$

が解となる.



## Theorem

非斉次熱方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

は

$$\begin{aligned} u(t, x) = & \frac{1}{(4\pi t)^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4t}} u_0(y) dy \\ & + \int_0^t \left\{ \frac{1}{(4\pi(t-s))^{\frac{n}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-\frac{|x-y|^2}{4(t-s)}} f(s, y) dy \right\} ds \end{aligned}$$

を解にもつ。

## Remark

- この例は解が具体的に書けたが, 一般には解は具体的に書けない.
- このように足し合わせで解が出てきたのは, 線型性があったからである.

- 非線型の場合, 例えば

## Example

$p > 1$  とする. 次の非線型熱方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = |u|^{p-1} u & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解は存在するか?

などについて考えることも重要である.

- また, 解の性質について考える (安定性や漸近挙動など) ことも重要である.



- 偏微分方程式にはまず適切性（解は一意的に存在して、初期値に連続に依存するか）ということが問題になる.
- 非斉次熱方程式

$$\begin{cases} \partial_t u - \Delta u = f & (t > 0, x \in \mathbb{R}^n). \\ u(0, x) = u_0(x) & (x \in \mathbb{R}^n). \end{cases}$$

の解は存在する.

ありがとうございました！

びよびよ